Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-01

小野市との連携事業（第2章自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業）

坂江，渉
人見，佐知子

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,5(平成18年度事業報告書):53-58

(Issue Date)
2007-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002250

小野市との連携事業

はじめに

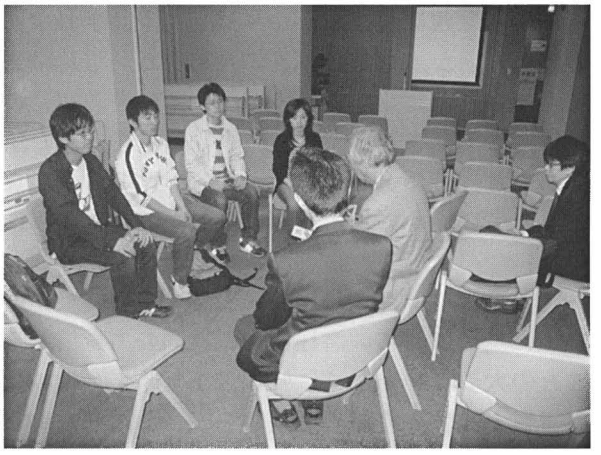
兵庫県小野市と神戸大学が、2005年1月26日に締結した社会文化にかかわる連携事業を進めるための協定（3年間）にもとづく事業は、本年度で2年目を終了した。本年度の主な事業は、（1)小野市立好古館秋の特別展「太閤秀吉と河合郷」への協力、および博物館実習の実施、（2）神戸大学での地域連携展示会「俘虜収容所に生きる－第一次世界大戦時青野原収容所の世界－」の開催、（3）地域連携展示会の関連企画、瀧川記念学術交流会館にて、神戸大学交響楽団の有志による捕虜たちの「慈善演奏会」の再現コンサートの開催である。以下では、それぞれの事業の内容を紹介しつつ、その成果と今後の課題について述べる（以上、人見佐知子）。

（1）特別展「太閤秀吉と河合郷」への協力、および博物館実習の実施

①大阪城天守閣への視察研究会

今年度の特別展の開催に向けての第1弾企画として、2006年5月14日（日）、河合地区地域づくり協議会地域展部会主催の視察研修会が開かれた。これは特別展のテーマに即して毎年開かれているもので、昨年は徳島県鳴門市の「板東俘虜収容所記念館」への視察がおこなわれている。今年は豊臣秀吉にゆかりのある大阪城天守閣（博物館）へ出かけ、関連する史・資料の見学と、学芸員からの解説をうけた。参加者は、小野市側から地域づくり協議会・コミセンかわい・南部5町区長・河合小教師・PTA・老人クラブ・子ども育成会・好古館などから約20名。神戸大学からは、坂江と森田竜雄センター研究員のほか、4名の実習生（畑久美子・野村昌平・社信大・村上貢章さん）の計6名。

同博物館に所蔵されている、河合地区に関わる秀吉関連の古文書は、残念ながら実見できなかった。しかしこれを通じ、豊臣秀吉をめぐる歴史像の概略や博物館展示の一端をつかめたと思う。また今年度の展示企画関係者が一堂に会し、お互いに親睦を深められたのは収穫であった。とくに今年度の神戸大学からの博物館実習生は4名もいた（昨年は1名）。これを機会にして、それぞれの顔を地元の人にある程度覚えてもらったのは、その後の実習時（共同調査時）に大きな意味をもったと考える。



②現地視察・懇話会

これに引き続き、4日後の5月18日（木）、今度は河合南部5町の主要な史跡視察会が実施された。当日の午後1時半、大学・好古館・地元関係者の3者が、コミセンかわいに集まり、各区長の案内で太閤の渡し・大寺廃寺跡・城谷山福善寺・近津神社・鈴の宮などをまわった。いずれも今年の調べ学習の対象候補となり得るところで、各区長から途中それぞれの場所や付近の景観などをめぐり、熱心な昔話や想い出話を出された。これ自身が即座に聞き取り調査対象になるようは話ばかりだったといえる。

さらにこの日の夕方、河合小学校の会議室に場所を移し、小学校と中学校の先生方も交えた懇話会が開かれた。センターからは、地元の方々が「ぜひ知って欲しい」「引き継いで行きたい」と考えている身近なことが歴史調べの対象となることや、地元の風景を写しだす古写真や古地図なども、立派な歴史復元の材料になることなどを話した。小学校と中学校側からは、今年は調べ学習に可能な限り積極的に取り組みたいとの話がだされ

た。今年度の地域展の成功に向けて、明るい見通しがついた。

③事前説明会

これから約1ヶ月後の6月下旬には、各地区ごとの事前説明会がおこなわれた。好古館とセンターのスタッフが、6月20日（火）に旭町、24日（土）に粟生町と三和町、25日（日）に新部町と昭和町、27日（火）に小野グリーンハイツの日程で各会館を訪れ、調べ学習の日取り決めや役割分担、歴史調査法のポイントなどについて説明。

出席した地元の方々（役員・PTA・老人会・子供会等）からは、「子供たちに歴史調べなど出来るのか」「親に負担がかかり過ぎて支えきれないのではないか」などの不安の声も出た。これは去年も出された意見であったが、今年はとくにこの点について、夜遅くまで相当長い議論を重ねた所もあった。全体として昨年以上に、地域の問題をどうしていくかの点が真剣に話し合われたように思う。

議論の中では、大村館長が去年までの経験を踏まえ、「子供たちの潜在能力や共同の力を信じることの大切さ」をとくに強調、また昨年、地域調べ学習を体験したある区長から、「かなりしんどかったが、これを通じて、その後子供たちが町内で老人に出会うと、積極的に挨拶するようになった。地域内の大人と子供の関係が徐々に変わってきた」という意見も出された。このような具体的な経験談などを積み重ねることにより、ある程度の納得や合意が得られたように思われる。

④調べ学習（歴史文化の共同調査）

以上のような準備過程をへて、いよいよ夏休み入りした直後の7月20日（木）から、各地区ごとに、子供たちの歴史調べ学習が始まった。具体的な進め方は、まずそれぞれの地区の小・中学生をいくつの班に分け、第1日目にそれぞれの興味にしたがい、地域内の歴史調べ作業をおこなう。次いで2日目にそのまとめをおこなうという段取りである。今年の調べ学習の日程は、7月20日（木）午後：昭和町①、21日（金）午前：昭和町②、25日（火）午前：粟生町①、午後：三和町①、26日（水）午後：粟生町②、27日（木）午前：グリーンハイツ①、28日（金）午前：グリーンハイツ②、29日（土）午前：旭町①、30日（日）午前：旭町②、31日（月）午後：新部町①、8月1日（火）午前：新部町②、4日（金）午後：三和町②であった。

各地区の身近な歴史文化の調査、しかもそれを子供たちと共同でおこなうといっても、必ずしも容易ではなく、専門的な立場から課題を押しつけるのではなく、あくまで子供たちの関心や地元の方々の意向を重んじなければならない。去年度のことを振り返ると、初年目ということもあり、それを引きだすのに、かなりの時間を要した。ところが今年の場合、各地区や学校の取り組みが熱心であったこと、また実習生が4人おり、それぞれの子供への接し方が上手く、作業そのものは比較的スムーズに動き出したと思う。これによりセンターや好古館のスタッフは、適宜各班につき、助言等を与える役に徹することができた。

子供たちが調べ上げたテーマは、水利・地名・屋号・学校・お寺など、今年もそれぞれの地域に即した、身近で親しみやすいものばかりだった。このような歴史文化の聞き取りや共同調査が、結果として各地域の活性化やコミュニティーの再生につながれば素晴らしいことであろう。4人の実習生もこの調べ学習に参加して、自らの学問と社会とのつながりや、地域史を継承していくことの重要性など、地域をめぐるさまざまなことを感じ取ったようである。最後にこの実習の後に提出された学生レポートの一部、および好古館で働く非常勤職員の八代醍ひとみさんの小レポートを引用しておく。

⑤学生レポートから

○4日間という短い実習でしたが、地域において語り継がれる歴史というものに初めて触れることができました。専攻している時代のせいもあって、歴史を調べることは史料を読むことだと思っていたので、お年寄りから聞ける歴史はど

んなものかと、最初は少し不安でした。でも実際に聞いてみると、史料から知る歴史よりも生き生きとしていて分かりやすく、話を聞いていて飽きることはありませんでした。ほんの2、30年前の話でも、現在からは想像できない地域のあり方に非常に驚きました。

○わたしも陥りかけたが、「歴史」というと何か壮大なものを想像しがちです。そのようなイメージであると、自分の住んでいる地域にそのような「歴史」はあるのだろうかと疑問に思うかもしれません。しかしそうではありません。歴史は身近にあり、どこにでも存在します。なにも日本史の教科書に載っていることだけが「歴史」ではありません。それはごく一部にすぎず、どの地域にもそれぞれの歴史があります。そのようなことに改めて気づかされた実習でした。

○今回の実習は、自分にとって地域史を伝え残していくことの重要性を実感させられたという点で、非常に意義深いものになりました。

○子供たちが大人に頼って調べとまとめを進めるのでは、十分な理解につながらないと思っていました。しかしいざ始まると、班の中の年長者がうまく班をとり仕切り、自分たちの力で、最後のまとめにこぎ着けていました。子供たちは子供たちなりの理解ができていたのではないかと思いました。

○子供たちの元気のよさに驚きました。エネルギーに満ちあふれており、いったん集中しだすと、その作業のはやさに驚きます。注意しなければならないのは、いかに興味をもたせるかという点と、集中力が切れた時にどうするかという点です。・・・集中力が切れてしまうと、何もいっても聞かなくなります。そのような時は、外に連れ出してフィールド・ワークをおこないました。すると、また子供たちはいきいきとして元気いっぱいになりました。

○聞き取り調査をすすめる中で、子供たちを手助けしていた保護者の方が、年配の方々に質問する形で、コミュニケーションをとっておられた。子供たちには難しい内容でも、親世代であれば理解ができる。子供たちへは表面的な内容しか伝えられなくても、親世代の方に深い内容を伝えることで、歴史を伝承するという目的は十分に達せられていたと思いました。

○各班で一通り話を終えた老人会の方は、互いに集まって昔話をすることで、自分の記憶を確かめたり、互いに修正し合ったりされていた。自分の記憶を全体に伝え、また記憶違いを誰かに修正してもらいながら、全体の歴史への共通認識が生まれ、そのような機会が増えるとともに、その共通認識はより正確なものになっていくと思います。またそんな場に専門家が同席することで、その地域の新しい歴史像を見つける契機にもなるのでしょう。

○実習当初に好古館の大村館長が、この調べ学習を「3世代交流の場」と位置づけておられた。今回の調べ学習はまさに3世代が、それぞれに合ったレベルで地域の歴史を再認識できる場であったと思います。

○この実習を体験してみて、学芸員としての見方が変わったような気がします。文化財や有名作品を研究する形式もあれば、小野市立好古館のように、地域と密着し、その中で展示会や行事をこなすやり方もあります。これらのことが充実するためには、大学や関係機関等の協力、また地域の支援が不可欠であると改めて感じました。これらのことを学ばせていただいた小野市立好古館には深く感謝いたします。

⑥小野市立好古館における神戸大学学生の博物館実習について(修士２回八代醍ひとみ)

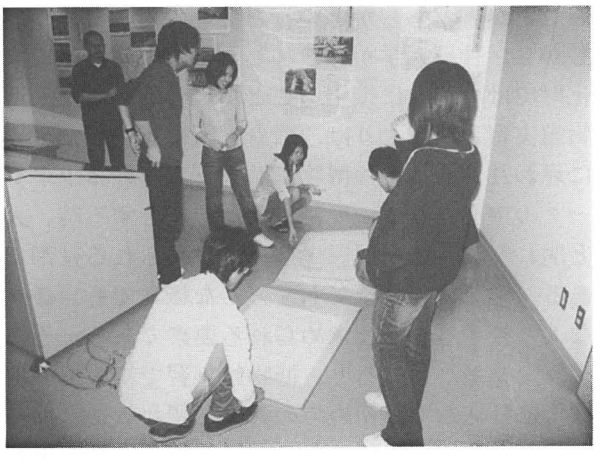
神戸大学学生が小野市立好古館で体験した博物館実習は、従来の博物館実習とはかなり様相の異なるものであった。内容は、小中学生・保護者・地域の古老・教職員による調べ学習への参加が中心であった。従来の博物館実習といえば、例えば掛け軸の掛け方を習うなど、文化財の扱い方を学ぶことが、どちらかというと多いのではないか。しかし、神戸大学から参加した学生の場合は、文化財ではなく人に接することが実習であった。博物館実習というよりは、教育実習に近かったように思われる。地域の博物館が人と人とのネットワークの中心としての役割を果たそうとする時、人と関わり合うことが、学芸員に求められる役割である。学芸員でなくても、どんな職業でも、様々な人と接することは求められる要素である。そのような見地から見ると、博物館実習で初めての地域に飛び込んで、初めての人々と関わることは、とても実践的な体験であると思われる。教育実習を経験した学生にとっても、経験していない学生

にとっても、それは言えるのではないか。学校で児童・生徒に接するのとは、また違った趣になるはずであるので。

実習中、学生は小中学生や保護者・古老・教職員と共に地域を歩き、写真を撮り、模造紙にまとめた。実際に地域を歩く中で、小中学生がどのようなことに興味を持つのか、地域の方々がどのような思いで調べ学習を行っているのか、体験的に感じることのできる場であったと思う。グループを構成する人々の個性や、調べるテーマによって、画一的ではなく多様な事象が起こり、実際に活動していく中での対応が求められる実習であった。これらの体験は、今後学生が社会人として活動していく中で、生かされていくであろう体験であると思われる。

(2) 地域連携展示会「俘虜収容所に生きる　-第一次世界大戦青野原収容所の世界-」の開催

昨年度（2005年度）、神戸大学と小野市立好古館の連携事業の一つ、地域特別展「青野原俘虜収容所の世界　-小野市河合地区の近世・近代から現代-」（10月1日～11月27日）は非常に好評だった。また学内の関係者の中からも、そうした連携の成果を学内の施設においても、もっと積極的に示して欲しいとの意見も寄せられた。そこで今年度は、そうした要望に応えるため、昨年度とほぼ同じ内容の展示会をもう一度学内で開くことになった（主催は神戸大学地域連携推進室・文学部地域連携センター、小野市立好古館の共催、神戸大学百年史編集室と加西市教育委員会の協力。会期は10月20日～11月5日。場所は神戸大学百年記念館1階展示ホール）。



展示会にあたっては、小野市立好古館の全面的な協力を仰いだが、その主な準備作業は、神戸大学が大学院教育の一環として取り組んでいる「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業に関わる院生（石井大輔・西田慎・岡本恵）がおこなった。西洋史学の大津留厚教授の指導のもと、西洋史と東洋史を中心とする院生、および数名の学生が、展示図録の作成、展示パネルやキャプションの作成、展示品の導線決定、あるいは展示品の搬入・搬出作業などを自らおこなった。また地域連携センターの坂江がこれに協力した。

具体的には2006年9月11日（月）と15日（金）、まず学内で具体的な段取りや準備作業等に関する打合せを実施。次いで9月26日（火）に好古館に赴いて打合せをし、その後、展示所蔵者のお宅等を訪れ、主旨説明と挨拶をおこなった。その間、院生たちが図録内容の検討や印刷所との交渉等をすすめ、会期直前の10月17日（火）には、展示品の搬入作業をおこなった（好古館の粕谷学芸員の指導・協力）。

10月20日（金）の開会式では、松嶋隆二文学部長、陰山茂小野市教育長、奥村弘地域連携推進室副室長の挨拶の後、テープカット。今回の事業を直接担当した大津留厚教授、発達科学部の岸本肇教授らによる展示解説もおこなわれた。徳島県の俘虜収容所のことを描いた映画「バルトの楽園」が公開されたこともあってか、開会式には約70人近くの見学者が集まり、またマスコミ各社からの多数の取材があり、この展示会への関心の高さを示した。

展示会開催に向けては、事前に地元新聞販売店に開催PRチラシの折り込み依頼や大学周辺の学校等にも訪れ、ある程度の広報宣伝活動もおこなった。その甲斐もあって、会期期間中には、大学周辺の住民も含めて、合わせて約550人の見学者があった。

大津留厚教授は、マスコミ各社の取材に応じ、「この展示会を通じて、神戸大学の地域連携事業を身近なものとして感じとっていただきたい。将来的にはオーストリアのウィーン市などで、『里帰り展示会』を開くことも視野に入れている。そうすることにより、地域連携事業を国際的な交流に結びつけることも可能になる」と述べた。センターとしても連携事業の成果を学内展示したのは、昨年度の灘区の「篠原の昔と今」展以来の二つ目となるが、事業の広がりと新たなる可能性を

示す注目すべき企画であったと思う。

(3) 地域連携展示会関連企画「俘虜収容所の慈善演奏会の再現コンサート」の開催

1919年3月、兵庫県の青野原収容所（加西市・小野市）で、第一次世界大戦で捕虜になったドイツ・オーストリア兵による「慈善演奏会」が開かれた。この時のプログラムをもとにした再現コンサートが、10月28日（土）の午前中、学内の瀧川学術記念会館の1階ホールでおこなわれた。これは昨年度の小野市内開催のコンサートがやはり好評で、もう一度学内で開催して欲しいという要望に応えての開催となった（10月20日～11月5日開催の地域連携展示会の関連企画）。

演奏したのは神戸大学交響楽団の有志25名。指揮は発達科学部助教授の田村文生氏。
学内関係者のほか、大学近隣の住民や新聞報道等でコンサート情報を知った方々も含めて100人近くの聴衆者が集まり、非常に華やいだ雰囲気の中で演奏が披露された。

曲目はトマ作曲・歌劇「レーモン」序曲、ヴェータン作曲・レヴリ、ワーグナー作曲・楽劇「タンホイザー」より巡礼の合唱、シューベルト作曲・軍隊行進曲第1番の4曲。演奏に先立ち、文学部の大津留厚教授と長野順子教授による解説もあった。

参加者からは、「非常に良い音で感激した」「神戸大学交響楽団の12月の定期コンサートにも出かけてみたい」「音楽を聴くだけでなく、歴史のよい勉強にもなった」「大学と地域とを結んだこういう企画をもっと進めてほしい」などの感想が寄せられ、市民の間で、今後もこのような企画への期待が膨らんでいることが明らかになった。

昨年度同様、この企画には、文学部の日本史関係者のみならず、西洋史、東洋史関係の研究者、音楽芸術関係の研究者、あるいは発達科学部の音楽関係の研究者、さらには神戸大学交響楽団の全面的な協力を仰ぐなど、全体として総合大学に相応しい取り組みになったとまとめることができる（以上、坂江渉）。

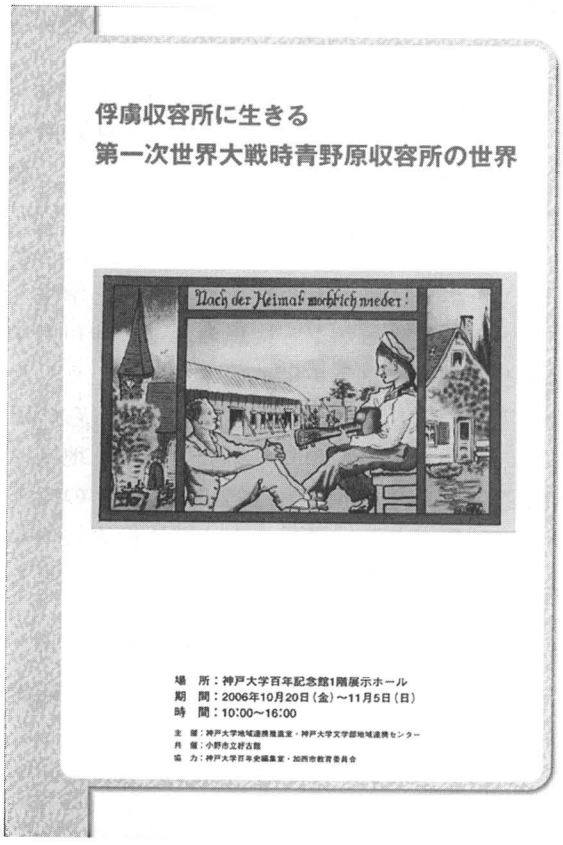
まとめ

今年度は、2年目ということもあり、地元の人たちとの連携も比較的スムーズに運び、大学が地域と連携して歴史文化を生かした地域づくりを行うことの、ひとつのモデルケースとして小野市との地域連携事業は実際に成果をあげつつあると思われる。

本年度の成果の第一は、博物館実習の充実があげられよう。去年は、試験的に実施した博物館実習であったが（昨年度報告書参考）、今年は、調べ学習への参加に先立ち大阪城天守閣に視察研究会したこと、そのうえで調べ学習に各人計4回参加したことで、子供たちや地元の人たちと学生との交流がより深まったように思われる。神戸大学文学部が好古館の協力を得て行っているこうした博物館実習のあり方は、実習生にとって自らの研究とその社会とのかかわりや研究の成果を地域に還元することを具体的・実践的に学ぶことのできる貴重な体験であり、これからの博物館実習のあり方を考えるひとつのモデルとして来年度以降もより積極的な実施が望まれる。

第二は、神戸大学と小野市の連携事業の成果として、昨年度好古館で行われた「青野原俘虜収容所の世界」を学内で開催したことである。これは、神戸大学と小野市との連携事業の成果を学内の関係者にも知ってもらおうとする活動が足りなかったのではないか、という昨年度の課題の克服につとめた結果である。この展示会は、学内の関係者に事業に対する関心をもってもらうことはもちろん、大学近辺の住民にも大学が行っている連携事業の成果をみてもらい、知ってもらうきっかけとしても非常に有用であった。

第三は、文学部の日本史関係者のみならず、総合大学としての利点を活かして他分野の研究者や学生の協力を仰いでの取り組みを今年度も継続できたことである。具体的には、学内での地域連携展示会に、西洋史や東洋史の院生の協力を得たこ

と、展示会関連企画であるコンサートの実施においては昨年に引き続き神戸大学交響楽団や発達科学部の研究者の協力を得たことである。

以上をうけて、来年度はこれまでの事業を総括しながら小野市との連携事業の集大成としての3年目の活動が待ち受けている。すでに述べた「成果」をより深めるとともに、初年度から課題としてもちこしてきた、歴史学の専門家集団である地域連携センターとして学問的成果をあげるという課題に取り組むことも重要となるだろう。これについても、住民の知的関心とリンクさせながら具体化させることが望まれよう。（以上、人見佐知子）